D 148　衣服のゆとり量と造形効果

椙山女学園大家政　○冨田明美　中保淑子

目的　衣服に加えるゆとりについては，運動・衛生機能面から研究され，必要量がほぼ結論づけられた。しかし，近年，極大衣服が流行し，新たに，極大衣服におけるゆとりの在り方が問題となってきた。そこで，服飾雑誌における極大衣服のゆとり量を調査し，出現の高いゆとり量を体表から導き出した基本パターンに付加した場合の造形効果について検討した。そして，極大衣服におけるパターン操作の根拠を見出だすことを目的とした。

方法　実験基体：成人女子体幹部から得た左右対象上腕付トルソー。実験衣：ゆとり設定箇所を前・後腋線と肩幅1/2 直下線の２段階にし，それぞれ４，８，１２cmのゆとり量を加えた６種のパターンを用い，厚さ0.41cm，綿100%シーチングで作製した。実験機器：モアレカメラFM－80。解析：空隙量は，得られた基体と衣服着用時モアレ縞写真を重合し，縞数差を読んで等変形線図を描いて求めた。造形性については，canon cx－1 図形解析装置により衣服横断面形状を描出して横矢示数を算出すると共に布表面に出現するノード形状を解析した。

結果　1)ゆとりを腋線上に加えた場合は，ゆとり量の違いによる差異が空隙に認められないが，肩幅1/2 線上には，量増加に伴なった空隙が形成されることがわかった。　2)横矢示数は，４，８，１２cmいずれのゆとりも肩幅1/2 直下線上のほうが大きく，立体性が高いことが明らかになった。　3) ゆとり量が１２cmになると，ノード数が多くなり，表面美的効果が低下することわかった。　4)肩幅の1/2 直下線上にゆとりを付加したパターンは，服飾雑誌における極大衣服のゆとりの加えかたに対応していることがわかった。